様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３３９１３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００２２２

研究課題名（和文）障がい当事者の社会参画を目指した地域コミュニティにおける音楽療法パラダイムの提言

研究課題名（英文）Proposal of music therapy paradigm in local community for social participation of handicapped persons

研究代表者
杉田　孝子（伊藤孝子）（Sugita Takako, (Itoh Takako)）

名古屋芸術大学・芸術学部・教授

研究者番号：２０３６７６７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　コロナ禍におけるコミュニティ音楽療法実践は大変困難であったが、代替として協働する北名古屋市社会福祉協議会職員へのインタビューとそれを発端とした自主シンポジウムを実施した。更に音楽療法をどう捉えているかについての参加者へのインタビューを学会発表する等、当初の計画とは異なる展開の機会を得ることとなった。これらにより、北名古屋市社会福祉協議会との相互理解が進み、会の実施だけではなく講座等によって他の社協団体に活動をＰＲできたことも生態学的観点から重要な展開であった。
　また、実践についても困難ながら新たなコミュニティでの音楽療法を数回行い、今後の展開について参加者とディスカッションすることもできた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　ノルウェーでの実践視察や理論についてのインタビューで明らかになったことを参照しながら、日本での実践に適応する試みを研究することによって、国内で数多く行われている個別音楽療法の理論的、方法論的蓄積を、コミュニティのつながりの形成や障がい当事者の社会参画に活用できる可能性を広げることができる。
　また、本研究における実践は大学教育と連関しているという独自性を有しており、音楽療法をはじめとする芸術の力を活かして、地域コミュニティのつながりや人的活性化を創出できる人材育成にも今後寄与することができる基盤となる。

研究成果の概要（英文）：Although it was very difficult to implement community music therapy practice in the Corona Disaster, interviews with staff of the Kitanagoya City Council of Social Welfare, with whom we were working as an alternative, and an independent symposium were conducted, which was triggered by these interviews. Furthermore, we had the opportunity to develop differently from our original plan, such as by presenting an academic conference on interviews with participants on how they perceive music therapy. These developments led to mutual understanding with the Kitanagoya City Council of Social Welfare, and it was an important development from an ecological point of view that we were able to publicise our activities to other CSW organisations not only by holding meetings but also through lectures and other means.
In terms of practice, it was also possible to carry out music therapy in new communities several times, despite difficulties, and discuss future developments with the participants.

研究分野：音楽療法

キーワード：音楽療法　コミュニティ　障がい者の社会参画　音楽療法実践パラダイム　北名古屋市社会福祉協議会　音楽療法実践グループ「マイエ」　個別音楽療法

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

研究代表者は、2004 年より大学（名古屋芸術大学）総合研究所の一室で、障がいを持った子どもや成人に対する個別音楽療法活動（グループ名「マイエ」）を継続している。個別音楽療法活動は全国各地に多数存在するが、職業としての実践現場が大学内に設置され、大学教育や研究との連携という性質を帯びながら存在する例は、管見の限り国内において類を見ない。障がいの種類や程度は様々である 40 名程度が対象者であり、音楽療法士は研究代表者と名古屋芸術大学音楽療法コースの卒業生らである。個別セッションにおいては、個々の対象者や保護者のニーズに合わせた目的を設定し、一定の成果を得てきた。

しかしながらそのプロセスにおいて、障がい児者との個室での活動形態のみでは、障がい児者の社会における孤立や生きにくさといった事態の改善に限界があるのではないかとの考えを持つに至った。つまり、障がいが引き起こす困難は、障がい者側だけの問題ではなく、コミュニティや社会の問題でもあるということを実践的に痛感したということである。そこで、大学が携わる実践活動であるというリソースを活かし、学生や卒業生音楽療法スタッフと協働し、より広い大学内施設や北名古屋市のコミュニティセンターでの音楽療法活動を展開してきた。これらの実践では、個別音楽療法で培ってきた音楽療法的介入、手法を活かしつつ、クライエントとセラピストといった立場を超えた音楽活動が産出され、更にはクライエントの家族や地域住民、他職種の人々も巻き込むものへと少しずつ展開しつつある。

上記の実践活動と並行して、応募者らは、2013 年より、ノルウェーの「コミュニティ音楽療法」について、理論的、実践的先駆者らの取り組みの最先端を視察、調査してきた（基盤研究Ｃ「ノルウェーに学ぶコミュニティ音楽療法の実践モデルと音楽療法士養成プログラムの構築」研究代表者 杉田政夫 2016 年～2018 年 16K02228）。「コミュニティ音楽療法」とは、個室内におけるクライエントとセラピストとの二者関係に限定して捉えられる傾向にあった音楽療法を、開かれたコミュニティ活動へと転換することで、障がい者や高齢者の社会参画の促進、健康の増進、文化的生活の実現を目指すものである。ノルウェーにおいては、社会民主主義的な政治的伝統の下、あらゆる人々の文化活動への参加、アクセスの平等性などの徹底が重要視されている。コミュニティと音楽療法の関係もその影響を色濃く受けており、移民、精神病患者、障がい児者、高齢者、受刑者（元受刑者）などを内包した多種多様なコミュニティ音楽療法が実践されている現場を視察することができた。

上記成果を基盤として、本研究では以下の問いを掲げる。つまり、大学内で行われてきた個別音楽療法を地域コミュニティとの関連で捉えなおし、コミュニティ音楽療法の理論を取り入れ発展させることで、障がい児者、大学を含めた地域コミュニティが如何に変容するのか、そのプロセスの中で障がい当事者の社会参画を如何に推進し得るのか、との問いである。

２．研究の目的

本研究では、個別音楽療法活動を日本の地域コミュニティ（名古屋芸術大学が所在する北名古屋市）に連関させることの意義を実践的に検証することを目的とする。国内においてもコミュニティと音楽療法との関係を問う研究や実践の前例は複数あるが、一対一の関係に限定されがちな個別音楽療法の形態を、コミュニティにひらいていくプロセスを追った研究は、ほとんどない。このことによって、国内で数多く行われている個別音楽療法の理論的、方法 論的蓄積を、コミュニティのつながりの形成や障がい当事者の社会参画に活用できる可能性を広げることができる。また、本研究における実践は大学教育と連関しているという独自性を有しており、音楽療法をはじめとする芸術の力を活かして、地域コミュニティのつながりや人的活性化を創出できる人材育成にも寄与することができると考えている。

３．研究の方法

本研究では、音楽療法活動を地域コミュニティで展開し、そのプロセスの検証をすることで、障がい当事者の社会参画を目指した地域コミュニティにおける音楽療法パラダイムの提言を行う。そのために、コミュニティ音楽療法をけん引するノルウェーの実践や理論の最新の動向についても調査を行い、応募者らの実践に取り入れる試みを同時的に行いながら、日本の地域コミュニティでの意義や独自の方法を探る。そのため、個別音楽療法の参加者とともに大学内でコミュニティ音楽療法の場を設け、それと同時に参加者へのインタビューを行い、当事者が音楽療法の場をどのように捉えているかを探り、それを起点とした地域コミュニティでの音楽療法活動の展開の意義について検討する。

４．研究成果

〇2020 年度

2020 年度はまず、新たな実践の特質に合わせて楽器や機材環境を調整する作業を行った。障がい児者は、心理的、身体的に様々な理由で通常の楽器では参加が阻まれるケースが多い。ノルウェーの実践においてはこの点を克服するために、特殊な電子楽器やアプリケーションを多用した実践が行われおり、日本で同様の活動を展開する際にも欠かせない要素になると考えている。その中でもノルウェーの音楽療法士トム・ネス氏が長年実践で用いてきたサウンドビームシステムは、様々な障害があっても演奏しやすい特性（体や指の動きで、遠隔的にメロディやハーモニーが操作できる）があるため、サウンドビーム社より入手し、学生との共同企画の場、マイエグループメンバーとの研究会、また個別音楽療法の場等にて試用を繰り返し、今後の展開に備えた。

また、当初予定していた北名古屋市社会福祉協議会との共同企画である参加型音楽療法や参与インタビューに関しては、コロナ禍につき実現ができなかった。そのため、2020 年度は、社会福祉協議会の職員と共に、これまでの活動の振り返りと今後の展望について省察することに専念した。方法としては、社会福祉協議会職員に対し、半構造化インタビューを行い、組織的目標や、個々のメンバーの個人的背景等について聴取した。さらに関連研究として、音楽療法実践における自閉症児 A との臨床即興演奏の分析を通し、音楽療法士側の A 児の捉え方、ひいてはそこから導かれる音楽療法の視座の転換について検討する論文を執筆した。

〇2021 年度

2021 年度は個別音楽療法を新たな場に展開する好機を待ったが、2020 年度に引き続き実施は困難であった。しかしながら、個別音楽療法については、前年度と比較して通常のスケジュールに近い形で実施することができた。そこで、これまで中心的ではなかった新たな活動に従事する機会を増やし、今後の地域での活動の可能性を広げる基盤づくりに取り組んだ。例えば、描画、動画や音声作品の作成、あるいはミュージックカフェ（歌声喫茶に類するもの）様の活動である。これらの取り組みは、セラピスト－クライエント間の関係性の実践的な省察につながるものであった。

2020 年度に行った社会福祉協議会職員に対する半構造化インタビューをきっかけに、日本音楽療法学会にて社会福祉協議会職員と共に自主シンポジウムを行った。これまで、協働者と音楽療法の学会で共に発表を行う機会を持ったのは筆者にとって初めての経験であり、このこと自体が実践コミュニティの豊穣に寄与する作業であったと考えている。本自主シンポジウムの内容については、紀要に執筆することでとりまとめた。

また、社会福祉協議会との共同企画である参加型音楽療法についても、2021 年度は実現することができた。その場において、個別音楽療法で取り組んできた描画等を応用する活動を取り入れ、地域コミュニティにおいても大変有効であることが分かり、今後の個別音楽療法と地域コミュニティでの実践の架け橋となるのではないかとの実感に至った。

〇2022 年度

2022 年度は個別音楽療法を新たな場に展開する好機を待ったが、2021 年度に引き続き実施は困難であった。しかしながら、個別音楽療法セッションの内容に、言語的やり取りを取り入れ、参加者やその親が音楽療法での体験についてどのようにとらえているかを探る試みを行った。

また、９月に行われた日本音楽療法学術大会では、コミュニティ音楽療法がテーマとして掲げられ、そのうち大会シンポジウムである「コミュニティでの音楽療法を考える」ではコーディネーターを務めた。３名の実践報告とそれに対する指定討論から構成し、日本における音楽療法実践をコミュニティ音楽療法の視点からとらえなおす貴重な場となった。

また、社会福祉協議会との共同企画である参加型音楽療法「親子♪音楽を楽しむ会」についても、実現することができた。その場において、個別音楽療法の参加者にも参加してもらい、自由な即興を全員で行うことができた。前年度までと比較して、親御さんの積極的な参加の様子が見られ、次年度以降の参加希望があったことは大きな収穫であった。

〇2023 年度

2023 年 9 月 19 日～22 日まで、ノルウェー・ベルゲンにて実地調査を展開した。スティーゲやヴィーゴ氏へのインタビューをはじめ、薬物中毒者支援施設で活動する音楽療法士、メンタルヘルスを抱える生徒が通う高校の音楽療法士、精神病院においてコミュニティ音楽療法を展開する音楽療法士と元患者にインタビュー等、多様な関係者の話を聞くことができた。また、元受刑者、発達障害者を参加者としたコミュニティ音楽療法、コミュニティミュージックカフェの実践を参与観察する機会にも恵まれた。これらの成果については現在取りまとめ中であるが、その一部について、福井大学で開催された子どもの医療・教育・福祉・芸術をテーマとした研究会で「ノルウェーの音楽療法（視察報告）」というタイトルで発表した。

個別音楽療法を新たな場に展開する試みとして、2023 年６月と 2024 年３月に音楽療法グループマイエに参加する方とそのご家族、音楽療法士、音楽教育学者が集うコミュニティ音楽療法の

会を行い、同意書を取った上でインタビューを実施した。
　また、社会福祉協議会との共同企画である参加型音楽療法「親子♪音楽を楽しむ会」についても、2022 年度に引き続き実現することができた。その場において、個別音楽療法の参加者にも参加してもらい、自由な即興を全員で行うことができた。2023 年は 2022 年以前からの継続参加者との座談会を執り行い、それを含めて活動の様子を地方ケーブルテレビが取材し、放映されたことは、今後の活動の広がりの契機として意義深いと考えている。さらに、尾張部福祉事業連絡協議会研究協議会という愛知県の広範な社協の役職者の研修会の講師に招聘され、「親子♪音楽を楽しむ会」の取り組みについて活動内容や意義を講義することにもつながった。

　研究期間の全般にわたってコロナ禍におけるコミュニティ音楽療法実践は大変困難であったが、その代わりに協働する北名古屋市社会福祉協議会職員へのインタビューとそれをもとにした自主シンポジウムの実施、音楽療法をどう捉えているかについての参加者へのインタビューとその一部についての学会発表など当初の計画とは異なる展開の機会を得ることとなった。これらにより、北名古屋市社会福祉協議会との相互理解が進み、会の実施だけではなく講座等によって他の社協団体に活動をＰＲできたことも生態学的観点から重要な展開であった。今後はこの期間で築いた土台を元に、地域団体との連携と大学内での連携（構内ギャラリーや新たに設立されたジュニアバンド）をつなぐことで、更なる障がい当事者の社会参画にむけた音楽療法の実践と研究に取り組む所存である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　8件）

１．著者名 杉田政夫・伊藤孝子・青木真理	４．巻 34巻２号
２．論文標題 ノルウェーにおける音楽療法士養成課程の教育とカリキュラム：ベルゲン大学とノルウェー国立音楽大学への訪問調査	５．発行年 2023年
３．雑誌名 福島大学地域創造	６．最初と最後の頁 5-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 青木真理	４．巻 ６号
２．論文標題 スクールカウンセラー活動の基本についての私論	５．発行年 2022年
３．雑誌名 福島大学人間発達文化学類附属学校臨床支援センター紀要	６．最初と最後の頁 1－8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 伊藤孝子・柴田朋子・杉田政夫・田端敬記・安田智・澁木和代	４．巻 第43巻
２．論文標題 社会福祉協議会と音楽療法士の協働 ― 持続可能な実践コミュニティの実現を目指して ―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 名古屋芸術大学研究紀要	６．最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 柴田朋子・伊藤孝子・杉田政夫	４．巻 第43巻
２．論文標題 音楽療法士とクライエントという関係性と場を捉えなおす試み ― コミュニティ音楽療法の観点から再考する ―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 名古屋芸術大学研究紀要	６．最初と最後の頁 45-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 杉田政夫・伊藤孝子・青木真理	４．巻 第33巻第２号
２．論文標題 ノルウェーにおけるコミュニティ音楽療法の実践　－刑務所内、及び出所後の音楽活動－	５．発行年 2022年
３．雑誌名 福島大学地域創造	６．最初と最後の頁 5-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 青木真理	４．巻 16
２．論文標題 臨床心理的支援を行うセラピストの態度について	５．発行年 2021年
３．雑誌名 福島大学心理臨床	６．最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 伊藤孝子・柴田朋子・杉田政夫	４．巻 第42巻
２．論文標題 自閉症児Aの反復演奏に対する音楽療法士の捉え方の転換について－転機となった臨床即興プログラムの分析を通して	５．発行年 2021年
３．雑誌名 名古屋芸術大学研究紀要	６．最初と最後の頁 29-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 杉田政夫・伊藤孝子・青木真理	４．巻 32巻2号
２．論文標題 ノルウェーにおけるコミュニティ音楽療法の今日的展開に関する研究 ： スティーゲへのインタビュー及び実践現場への訪問調査を中心に	５．発行年 2021年
３．雑誌名 福島大学地域創造	６．最初と最後の頁 37-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 青木真理	4．巻 第2巻
2．論文標題 スクールカウンセラーガイドブック作成の試み	5．発行年 2020年
3．雑誌名 福島大学人間発達文化学類附属学校臨床支援センター紀要	6．最初と最後の頁 113-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 青木真理・谷雅泰	4．巻 第2巻
2．論文標題 デンマークの若者支援の新しい制度 －KUIについて－	5．発行年 2020年
3．雑誌名 福島大学人間発達文化学類附属学校臨床支援センター紀要	6．最初と最後の頁 45-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 杉田政夫・伊藤孝子・青木真理	4．巻 34巻２号
2．論文標題 ノルウェーにおける音楽療法士養成課程の教育とカリキュラム ： ベルゲン大学とノルウェー国立音楽大学への訪問調査	5．発行年 2023年
3．雑誌名 福島大学地域創造5	6．最初と最後の頁 5-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　4件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 伊藤孝子・渡邊惠里・池田憲治・野路恵美・杉田政夫
2．発表標題 コミュニティでの音楽療法を考える
3．学会等名 第22回日本音楽療法学会学術大会　大会企画シンポジウム（招待講演）
4．発表年 2022年

１．発表者名 小柳玲子・伊藤孝子・三宅博子・植木亜弓・井上勢津
２．発表標題 コミュニティ音楽療法について考える ～私たちは「コミュニティ」と「音楽」と「療法」をどう捉えているのか
３．学会等名 第22回日本音楽療法学会学術大会　自主シンポジウム
４．発表年 2022年

１．発表者名 伊藤孝子・安田智・田端敬記・柴田朋子・杉田政夫
２．発表標題 社会福祉協議会と音楽療法士の協働について　－持続可能な実践コミュニティの生成を目指して－
３．学会等名 第21回日本音楽療法学会学術大会　自主シンポジウム
４．発表年 2021年

１．発表者名 青木真理・原真理子・伊藤孝子・杉田政夫
２．発表標題 リンドグレーンお茶会―コロナ禍の中で生まれた多世代間・多文化間交流の実践
３．学会等名 アートミーツケア学会2021年度大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 青木真理
２．発表標題 支援活動委員会シンポジウム企画「コロナ禍での心理的な困難―新型コロナは“こころ”にどんな影響を与えたか－」において「コロナ禍の中でのスクールカウンセリングー福島県の場合ー
３．学会等名 日本心理臨床学会第40回大会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 伊藤孝子
２．発表標題 ノルウェーの音楽療法実践の事例紹介
３．学会等名 2021年度総合病院精神学科学術大会（招待講演）（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 伊藤孝子
２．発表標題 コミュニティ音楽療法理論－ノルウェーの実践風景の紹介も交えて
３．学会等名 日本音楽心理学音楽療法懇話会・講習会（359回）（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	青木　真理 (Aoki Mari) (50263877)	福島大学・人間発達文化学類附属学校臨床支援センター・教授 (11601)	
研究分担者	杉田　政夫 (Sugita Masao) (70320934)	福島大学・人間発達文化学類・教授 (11601)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	柴田　朋子 (Shibata Tomoko)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関